（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　今村　啓爾

本論文は、東北・関東・中部地方の縄文時代前期末ー中期初頭に展開した、縄文土器の分析を通して浮き彫りにされた土器系統・型式の実際に基づき、往時の人間活動の実態を読み解こうとする意欲的かつ完成度の高い研究である。申請者はこれまで 40 年間以上にわたって一貫して縄文時代の土器型式研究を推進し主導してきたが、その過程で発表してきた上記テーマに関する諸論文をまとめた本書は、それ自体が縄文土器型式研究の学史を体現しており注目すべき成果と言えよう。

本論文は 6 部から成り、書き下ろしの序論第Ⅰ部と結論の第Ⅵ部を除けば、分析に相当する第Ⅱ－Ⅴ部は、申請者がこれまで一貫して発表してきた既発表論文(補論も含む)から構成されている。

第Ⅰ部と第Ⅱ部で、縄文土器型式研究の方法について確認した後、第Ⅲ部では、対象地域の考古学的年代軸を確定する分析作業としての編年を確定させている。申請者の目的は、人間活動の動態把握にあるので、既存の年代幅よりも精度の高い編年網を確立せねばならない。そのため、まず関東地方前期後葉の諸磯式から前期末の十三菩提式を経て中期初頭の五領ヶ台式に到る細別編年を縦軸として定め、続いて第Ⅳ部では、これらの諸型式・系統に密接に関係する中部・東北地方の北白川下層式・松原式・踊場式系統・大木 6 式といった同時期型式・系統の相互影響関係と言う横軸を確定させている。第Ⅴ部では、この編年的な関係態に基づいて、精緻な土器系統の読み解きを展開する。さらに結論に当たる第Ⅵ部では、きわめて急激かつ広範囲に移動する人間集団の実像を明らかにし、その背景には、安易な環境決定論では説明できない縄文時代の各地域・時期の歴史的個別性が存することを明らかにした。

本論文は、縄文時代前期中葉と中期中葉という繁栄期の狭間にあって、これまでほとんど本格的な研究が試みられてこなかった前期末ー中期初頭の衰退期に焦点をあて、綿密かつ長期にわたる周到な分析の積み重ねにより、縄文土器型式研究がもつひとつの到達点を示しえたと評価できよう。人間活動の動態の背景となる「生態」に関する言及が少なかったのは残念であるが、これは申請者も言及するように、型式研究を越えた生態論等の分野の課題でもあり、本論文の意義を損なうものではない。

以上より、本委員会は、博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。